「和紙の魅力を再発見」

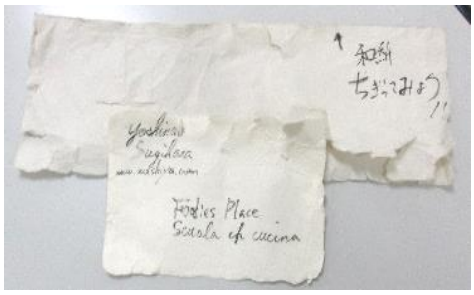
～他の紙とどこが違う？世界に誇る和紙の実力～

2019 年 12 月 12 日（木）実施　　第一支部研修終了報告

台東区民会館第三会議室にて「和紙の魅力を再発見」研修が実施されました（9:30～11:45）。参加者は 26 名（正会員 20 名、非正会員 4 名、委員 2 名）、関東地区のみならず遠くは滋賀、愛知県からもご参加いただき、熱心に講義に耳を傾けました。

講師は「和紙ソムリエ」として知られ、世界に向けて和紙の魅力を発信されている、福井県の株式会社 杉原商店の社長、杉原吉直氏です。

まず、スライドで写真や地図を見ながら、東西の紙の歴史を学びました。大陸から製紙技術が日本にもたらされたのは記録によると 610 年。私たちがよく知る「流し漉き」という日本独自の製造方法が成立したのは、平安時代と言われています。日本古来の植物の楮・三椏・雁皮などの樹皮から取った繊維を原料とし、トロロアオイという植物の根から取れる「ネリ」によって水の粘性を高めることで可能になった技術です。参加者は実際に材料のサンプルと出来上がった和紙を手に取り、その質感を確かめました。



和紙の特徴は繊維の長さ（空気を含み、断熱効果がある）、構造（糊ではなく水素結合）、素材（完全な天然素材）、耐久性です。その寿命は 1000 年といわれます。和紙があってこそ多色刷りの浮世絵が可能になりました。参加者は和紙と一般的な洋紙を実際にちぎってみたり透かして見たりして、繊維の長さと強度の違いを実感しました。

動画で和紙の製造工程も紹介されました。本当に手間がかかります。先人たちの努力によって発展し、作られてきた和紙のお陰で、現在の私たちは 1000 年も前に書かれた物語を読み、当時の人々が日本の四季を愛でていた感情すら共有することができるのだと実感しました。

また、現代の和紙の活用例も学びました。様々な技術を駆使して作成された和紙が、パリのブランド店のディスプレイや空港のラウンジなどに利用されている例が紹介され、その見事さに参加者から驚きの声が上がりました。和紙の持つ多様性、そしてその耐久性と美しさに改めて感心し、身近な「和紙」の凄さと実力を実感する研修でした。